

マンズフィールドの子供のイメージ

川崎医療短期大学 一般教養部 (英語教室)

名木田恵理子

(昭和56年9月12日受理)

The Image of Childhood (I)

— Katherine Mansfield

Eriko NAGITA

Division of General Education (English),

Kawasaki Paramedical College

Kurashiki 701-01, Japan

(Received on September 12, 1981)

概 要

キャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield, 1888—1923) がその90余篇の短編小説の中で創り出しているのは、愛と美に溢れた人間関係のある世界と孤独と幻滅が支配する世界の二つだと言ってよいだろう。特に、彼女は前者を「ニュージーランドもの」とよばれる、自分の故郷を舞台にした作品群 (代表作として高い評価を受けている) の中に創造しているが、そこで重要な役割を果たしているのが「子供」である。彼女は、子供のイメージを通して自分の一方の本質的テーマである愛の世界を表わそうとしたのである。そこで、その世界を解析しようとするなら、まず「ニュージーランドもの」に描かれている「子供の世界」を明らかにすることが必要となってくる。彼女の子供達は、ここでとり上げた 'At the Bay' (1921) という作品でもわかるように、自然と一体化し、純粹・無垢の心を持ち、美しく素朴な、希望に満ちた生を享受している者として描かれている。そこにはマンズフィールド自身の「生」への激しい憧れと故郷ニュージーランドの人々と自然の思い出が映し出されていて、これが彼女の愛の世界を創り出すと同時にその子供像を生き生きとしたものにしていくといえよう。

Résumé

The world that Katherine Mansfield (1888-1923) depicts in her about 90 short stories can be roughly classified into two groups—one is the world filled with love and warmth and the other the world darkened by isolation and disillusion. She creates the former mainly in what is called 'New Zealand Stories' (the scenes of which are laid in her homeland) and many of her memorable works are among them. It is remarkable that boys and girls (the Trout brothers and the Burnell sisters) play there very important parts. Mansfield represents her world of love through the images of children. So when we want to analyze her world, it is necessary to understand the world of children in New Zealand Stories. For example, in 'At the Bay' (1921), children show themselves as an image of beauty and hope. They, playing innocently in nature, find a true beauty there and live a fruitful life. In this image we can see her own longing for 'life' and love of the nature and people of New Zealand, which inspire her to create the ideal

world of love and the living image of children.

I

英文学の中に子供が占める位置を見る時、私たちは少なからずその大きさに驚かされる。多くの作家が子供を主人公とした、或るいは子供に重要な意味を持たせた作品を公にしてきた。彼らは子供を描くことによって自分達にとって本質的な何かを表現しようとするのである。そのため文学における子供の姿は、時代の思潮、作家の人生観・主張、更にはその幼年時代にまで遡るぼる実人生などを反映して多様な展開をみせている。ロマン派の詩人、ブレイク (William Blake)、ワーズワース (William Wordsworth) がうたうのは子供の自然さや無垢の魂であり、そこには感性礼讃の精神が高揚している。ディケンズ (Charles Dickens) の子供は社会の圧力によりしいたげられる弱者として社会悪告発に一役かっている。またジョイス (James Joyce) の子供達は少年から大人へと社会との接点でとまどいながらも成長していく目ざめる意識を、ボウエン (Elizabeth Bowen) の子供は痛ましくも大人によって傷つけられ絶望する犠牲者として、人間に課せられた運命としての樂園喪失を表わしている。更にグリーン (Graham Greene) の小説に出てくる子供達はさながら「悪魔の子」というイメージを持ち、人間の根源にひそむ悪を代弁している¹⁾。

ここにとり上げる キャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923) も子供を描くことにすぐれ、一つの印象深い世界を創り上げたとして評価を受けている作家である。彼女の子供像はいわゆる「ニュージーランドもの²⁾」とよばれる作品群に登場する、バーネル家或るいはシェリダン家の姉妹・従兄達の中に創られていて、その生き生きとして印象的な故に、「英文学の中で立派に一人立ちしている創造物³⁾」といわれている。そこでここでは「ニュージーランドもの」の中から 'At the Bay'⁴⁾ をとり上げ、そこに描かれている子供の世界を明らかにし、それが持つ意味をさぐることでマンズフィールド創作世界の本質に近づいてみたい。

II

'At the Bay' は *Prelude*⁵⁾ の続篇的なものとして書かれ、マンズフィールド円熟期の安定した見事な作風が開花しているという高い評価を受けている作品である。これはまたマンズフィールド自身にとっても、前後して書かれた 'The Garden-Party'⁶⁾ とともに珍しく満足のいく、愛着の深い作品だったようで、友人に宛てた手紙の中で次のように述べている⁷⁾。

私は昨夜じゅうそれにかかっています。私はあらゆる種類の場所を——あちらをのぞきこちらをのぞきしながら——さまよいました。良いものであれかしと望みます。これは私の書きうる最善の作品です——そして私の全霊全心があるの中に注ぎこまれています……小さな一かけらにいたるまで⁸⁾。

またこの後に書かれた手紙⁹⁾にも「海草のにおいのする作品」であり、その載る雑誌一部ごとに「小さな鋤とバケツ」を添えるよう提案しようかと思っているという言葉が見られる。これらからは作者の愛着と作品の全体的雰囲気がかがわれるのであるが、その通り‘At the Bay’に描かれているのはすばらしい海辺の自然と生き生きとした子供の世界である。特にここに言及されている「トランプに打ち興ずる子供達」、「小さな鋤とバケツをぶらさげて海辺へくり出す子供達」の姿は象徴的で忘れがたいものとなっている。しかしながらもちろん、この作品は子供の世界を描くことを目的とした、いわゆる「児童文学」ではない。描かれている子供の世界は非常に印象的ではあるが、そこには同時に、海辺の避暑地の一日に凝縮された様々な生の形態があり、絶えず「人生とは」という問いかけがなされている。そしてそのような大人達の生との対照に子供達の生があり、それらを支配する自然があり、その中で作者は「自分にとって本質的なもの」を表現しているのである。つまりここでも子供の世界は単なるスケッチ以上の意味を持って存在しているといえるであろう。では、大人の生の中であって「小さな鋤とバケツ」に象徴される世界がどのような意味を持つのか、場面を追って見ていき、そのイメージを明らかにしていくことにする。

まず子供達（バーネル家の三姉妹、イザベル、キザイア、ロッティ）は、光あふれる朝の食堂にめいめいのポリッジの皿をかかえて登場する。彼女らは青いメリヤスのシャツとパンツという格好で、むき出しにした脚は日に焼けて褐色になっている。冒頭部（第一章）の夜明けの描写が暗示するように、この朝は‘a perfect morning’であり、開け放たれた窓からは太陽の光がさし込み、明るい色調の壁や床を照らし、食卓の上のものはキラキラと輝いている。（とはいっても、そういう外界とは対照的に大人達の間にはしっくりいかない、イライラした気分が漂っているのだが。）この自然の恵みを受けて子供達は朝食がすむと鳥小屋から放たれた雛のように牧場へと走っていく。複雑でわけのわからない大人の世界は無用とばかり、自然の中へと入っていくのである。

「待って！ イザベル、キザイア」——末っ子のロッティは牧場の囲い地の柵段を一人で越せず、途方にくれている。キザイアは彼女を置いてきぼりにはできない。手伝ってやるとロッティはやっと降りることができて、もうニコニコと「あたし、段を登って越えるのうまくなったわね。」と楽天的なことを言うのである。三人は丘の上を登っていく。小さな麦わら帽子が動いたり、思案気に止まったり。その手では鋤とバケツが揺れている。自然の中では彼女達こそ‘minute puzzled explorers’として主人公を演ずるのである。渚の水うち際では彼女達の従兄トラウト兄弟が砂掘りに忙しい。彼らは難破船の「宝物」を探しているのだ。兄のピップはもったいぶった言い方をして「誰にも言わない」と約束させて「宝物」を見せる。女の子達は「胸に十字を切って」誓い、彼の手が開くのを待つ……。

彼の手が開いた。光のほうに何かをかざした。それはきらめき、ピカピカして、とても美しい緑いろだった。「これはネメラルだよ」ともったいぶってピップが言った。「ほんとうに、ピップ？」

イザベルまでが感心した。美しい緑いろのものは、ピップの指の間で躍るようにみえた。ベリル叔母さんも指輪に「ネメラル」をつけていたが、あれはとても小さかった。これは星のように大きくて、もっとずっと美しい¹⁰⁾。

昼近くには海辺に海水浴の人が集まり、子供達も水着に着がえると海の中へ飛び込んでいく。トラウト兄弟は勇敢に突進していき、イザベルとキザイアは後からついていく。ロッチェは水際で波を相手に遊んでいる。でも「おじいさんひげのような」大きな波はまだ怖いのだ。その渚も午後になると人影がなくなり、海辺の自然は子供の眼を通して見るとまた違った様相を示してくる。

向うの、海草のたれ下がっている岩の上では——こういう岩は干潮のときは、水を飲みこみやって来た毛むくじらの獣のようにみえるのだが——その小さな岩間の水たまりのひとつひとつに、太陽の光が落ちて、銀貨のようにクルクル回っているようだった。それらは躍り、それらはふるえ、細かなさざなみが穴だらけの岸べりを洗った。上からかがんで見おろすと、どの水たまりも、ピンクや青の家々が岸辺にむらがり集まっている湖のようだった。そして、おお！ それらの家々のうしろには、山岳地帯がある——峡谷も峠も危険な谷川も、また水ぎわに至る恐ろしい小道も。水の下には海の森林がゆれなびいていた——ピンクの糸のような木々や、びろうどのアネモネや、オレンジの実が粒々とした海草。いま底の小石が動き、ゆれて、まっ黒い触手がチラッと見える。そうかと思うと、糸のように細い生きものがゆらゆらと過ぎ、そして見えなくなった。ゆれているピンクいろの森林に何ごとか起っている。それは冷たい月光のような青いろに変っていく。そしてまた、いともかすかな「ポコッ」という音がした。何がああ音を出したのだろうか？ あそこで、どんなことが起っているのだろうか？ 熱い陽ざしの中で、なんと強く、なんと湿っぽく、海岸が匂うことだろうか……¹¹⁾

ここにある「毛むくじらの獣」のような岩、「ピンクや青の家々が群がり集まっている湖」に見える水たまり、「峡谷も峠も危険な谷川もある山岳地帯」の岩場、「水の下海の森林」、「ポコッという不思議な音」は全て、大人の眼から見れば何の変化もない海辺の様子だが、子供の眼によれば神秘的で驚異に満ちた自然の怪となるのである。

さて、バンガローではキザイアが祖母のフェアフィールド夫人と昼寝をしている。短いズロースと下胴着だけで腕も脚もむき出しのままである。「おばあちゃん、何見ているの？ どうして手をとめて壁なんかじっと見ているの？」——老婦人は何年も前に鉾山で日射病にかかって死んだ息子のことを想い出していたのだ。悲しいのではない。何となく歳月を振り返ってみる——人生とはこんなものとあきらめながら。しかしキザイアにはまだそんなことは理解できないし、「死」を許せない。

「おばあちゃんは死んじゃいけない。」キザイアは断固として言った。「ああ、キザイア」——お祖母さんは顔をあげて、微笑しながら、頭をふった——「そんな話やめようね」「でも、おばあちゃんは死んじゃいや。あたしを置いてっちゃいや。おばあちゃんがいなくなるなんて、いや」それこそ恐ろしいことだ。「決して死なないって約束して、おばあちゃん」と彼女はせがむように言っ

た。老婦人は編み物をつづけていた。「約束して！ 決して死なないと言って！」¹²⁾

返事をしない祖母に対してキザイアは膝に飛び上がってキスしたりくすぐったりして訴え続ける。「死なないと言って、言って！」二人はくすぐりあい、抱きあい、笑い、そしてもうすっかり「死」のことは忘れてしまった。

お茶の後のバーネル家の洗濯小屋には妙な一団が集まっている。ここは誰にもじゃまされないう子供だけの世界を作るのに最適の場所である。夕暮が迫るのも忘れて子供達は牡牛、雄鶏、ロバ、羊、蜂になりきってゲームに打ち興じ、ゲームの仕方がよくわからないロッチィを仲間はやさしくひきたててやる。

ロッチィは二人の顔を見た。それから頭をたれた。彼女の唇がふるえていた。「あたし、ゲームやりたくない」と小さい声で言った。ほかの者はみんな共謀者のように、眼と眼を見合せた。みんなは、ロッチィの言葉がどういうことを意味するか知っていた。ロッチィはそこから出ていき、どこか、すみっことか、壁のところとかまた椅子のうしろとかで、エプロンを頭にかぶって立っているのを見つけられることになるだろう。「ねえ、ロッチィ、やりなさいよ。とてもやさしいのよ」とキザイアが言った。そしてイザベルも、後悔して、まったく大人のような言い方で、「あたしのやるのをよく見なさいね、ロッチィ、そうすればじきに覚えられるわよ」「元気を出せよ、ロッチィ」とピップ。「ね、ぼくがいいことしてあげるから。一番初めの札をあげるよ。ほんとうは、これ、ぼくんだよ、でも、それをあんたにあげよう。ほらね」そして彼はその札をロッチィの前にパタンとおいた¹³⁾。

ロッチィは元気づき、興奮の中ゲームは進んでいく。「モーオ…オオオ」「ブブーン」「コケッココー」「メエュー」……ロッチィは自分がロバであることをすぐ忘れてしまうが、キザイアは彼女と同時にポイントを持った時、わざと待ってやる。

ほかの連中がロッチィに合図して指さした。ロッチィは真っ赤になった。彼女はどぎまぎして、やっとのことと言った——「ヒ、ヒ、ヒーン！ キザイア」¹⁴⁾。

やがて彼らはもうすっかり日が暮れてしまったのに気づく。急に怖くなった子供達。その時、窓ガラスに青白い顔、黒い眼、黒いヒゲ——ワッと逃げ出す子供達。実はそれは兄弟の父ジョナサンだった。子供達の広がる空想は何でも「すごいもの」にしてしまう。蜘蛛だって怪獣に、大人の顔だって幽霊になってしまうのだ。

III

ここに展開されている子供の世界を見てみると、他の「ニュージーランドもの」の子供の世界にも共通しているのだが、あるイメージをあげることができる。その第一は、彼らの一日が「自然」と密接につながっているということである。「小さな鋤とバケツ」が象徴する世界に

は、不潔な街の裏路地も厳格で陰うつな学校も大人社会による不当な圧迫も貧しさもない。あるのは子供達が自由に伸び伸びと遊んでいたあの古きよき牧歌時代を思わせる、明るい大いなる自然である。この自然は子供達を脅やかしたりはしない、彼らによりよき生の場を提供してくれ、暖かく親しく見守り、彼らと共に生の喜びを分かっている。——すがすがしい夜明け、光あふれる朝、海辺に息づく動植物、原色の花が咲き乱れるバンガローの庭、神々しいばかりの夕焼け、かすかに海の響きが聞こえる夜更け——こういった自然を舞台としていることで、子供達の「生」はより豊かで創造的なものとして描かれうるのである。また彼らの自然との関係は受身的なばかりでなく能動的なものとしての展開も与えられている。即ち、大人の眼によれば見過ごされてしまう自然の妙を不思議ですばらしいものとして蘇えらせ、最大限にその美を印象づけているのが、子供の存在なのである。このように子供と自然との関係は非常に密接であり、故に 'At the Bay' における子供のイメージは生命力に溢れた、明るくたくましく創造的なものになっているといえよう。と同時に、自然との一体化は大人にはもはや望めぬ生活であり、自然の恵みを全身に受ける子供の姿は人間の根源的、理想的姿としてなつかしさと憧れを読む人の胸に喚び起こしている。

次にあげる子供のイメージは、純粹・無垢の魂——やさしく、自然で、汚れない心——である。純粹・無垢の魂は大人達のように物事を「経験」の曇りガラスで見たりせず、まっすぐ素直に見つめていく。それ故、あらゆる所に価値を見い出せる。土中から掘り出されたガラス玉は彼らの純粋な心を通して本物のエメラルド以上に輝き、海辺の自然はいつ見ても新鮮で驚嘆すべき光景を映し出していき、大人から見れば他愛ないゲームも生を満喫する時となって高揚する。また素直でやさしい心は、弱者に対する心よりの共感を生み、彼らの生活をほのぼのと豊かなものにする。それは思惑に捕われ、ぎくしゃくした人間関係の中で不安と悔恨と焦りのうちに「生」をすりへらしていく大人の生活とは対照的な輝きを持っているといえよう。——ささいな事に絶えずイライラさせられる、心の外被のもろいスタンレイ、何かを夢みながらも結局何もなしえぬまま老いていき無力感を味わうジョナサン、現在に疲れ少女時代の夢の中に安らぐリンダ、平凡だが変化のない生活にあきたらず揺れ動く自らの心を持てあましているベリル——彼ら 'grown-ups' は絶えず 'life' とはと問いかけ、考え、語るが、結局の所、真の生をものすことができずに、果てしなき欲求不満の中でもがいているにほかならない。

更に、子供の無垢の魂は他者をつき動かす強さも生んでいる。即ち、単純であるが故の存在の強さが、単に大人の世界の暗さ・複雑さを浮きたたせるだけでなく、それを圧倒し、侵食し、駆逐するイメージを創り上げているのである。フェアフィールド夫人の過去への想い、そして「死」の想念はキザイアの一途な攻撃に払拭され、子供に愛を注げないほど疲れてしまったリンダの拒否も赤ん坊は執拗にはねかえしていく。一途で純粋な叫びは真直に人の心へ入っていき、無力感にさいなまれる大人さえ動かすのである。このように子供のイメージには他へ波及する強さ、更に明日へ伸びる可能性と魂の救済という希望が映し出されている。

むろん、子供のこういった世界は完全に守られているわけではない。マンスフィールド特有

の、輝く光に対する陰の部分が生徒の世界にも一つの不安を投げかけている。それはキザイアの意識に入ってくる「死」のイメージであるが、彼女の無垢な心は「死」を避けたい運命として恐れたい。ここでは「死」は彼女の「生」の輝きの前にその絶対的支配力を失い、むしろ彼女の「生」に対する激しい意識を浮かび上がらせるものとなっている¹⁵⁾。

このように 'At the Bay' に見る子供のイメージは、(1) 自然と一体になり、その恵みを受け、伸び伸びと生を享受している自由の子、(2) 純粋・無垢の魂を持っていて大人達が既に失ってしまった、果てしなき夢とやさしさと美にあふれた生活をものしている子、(3) その存在の力強さ故に、他者の魂を救済し、未来へと伸びる可能性を持つ希望の子、というものだといえよう。

IV

始めに述べたように、作家が子供のイメージを通して自己にとって本質的なことを表現しようとする時、子供は「無垢の天使」とも「成長のシンボル」とも「大人の犠牲者」とも「悪の権化」ともなってきた。その中であってマンスフィールドの描く子供像は、これまで見てきたことでわかるようにロマン派詩人が讃えたような理想的な姿を示しているといえる。しかしながら、どうあっても彼女は二十世紀の科学知識や心理分析の洗礼を受けた、「不毛の時代」の作家であり、その子供達がブレイクやワーズワースと同質なところから生まれているとは言い難いのである。では、マンスフィールドの子供像の固有性は、背景は、どこにあるのか、そして彼女の本质とどのようにつながっているのだろうか。

彼女はその短い生涯に90余篇の短編小説を書いているが、そこに描かれているのは人間関係が織りなす心のドラマであり、様々な「生」の形態である。これは日記や手紙を見てもわかるように、彼女自身「人生とは何か」「私は一体何なのか」という問いかけに心を奪われていたため、そこから愛の不在や裏切りによる幻滅と孤独の人間像¹⁶⁾から、ほのぼのと暖かい、愛と善にあふれた姿までのあらゆる形態が生まれてきたといえる。しかも周知の如く、彼女の作品は彼女自身の人生の見方或いは人生そのものと深い関係があり、その現実の孤独と苦悶¹⁷⁾は生の幻滅の世界を創り出し、「生」に期待し、憧れる気持ちからは愛と善の理想世界が生まれたとあってよかろう。即ち、今まで見てきた子供像は、現実には生の不安にさいなまれてきたマンスフィールドが、それだからこそ人一倍渴望し続け、創造の世界にイメージ化したものなのである。子供達の素朴で自然で希望に満ちた姿は、彼女の救いようのない現実、それにも負けず愛と美に溢れた生を創作の中に求め、その中で再生しようとする意志によって、より輝ける存在に創られているといえよう。

実は、この「真実の、素朴で、誠実な、充実した生活」¹⁸⁾の具現者は子供達ばかりではない。人生とは神秘的であると同時に単純でもあるが故、素直にその美や愛や苦痛を受け入れられる素朴な精神が必要だと言う時、彼女はもう一つのタイプの「真の生の享受者」を見ている。それは 'The Voyage'¹⁹⁾のフェネラの祖母、'The Daughters of the Late Colonel'²⁰⁾のジョ

ゼフィーンやコンスタンシャ、‘The Canary’²¹⁾の「私」など、苦悩をも含めて人生を受け入れていく、静かで素朴な老婦人達の姿にある²²⁾。しかし、彼女達の中には燃えるような生のヴィジョン、生の希望、未来への前進は映し出しにくい。マンスフィールドの強烈な「生への憧れ」はやはり純粹・無垢の心を持ち、明日へ向かって伸びていく子供達の中にこそ表わされうるといえよう。

このようにマンスフィールドの子供のイメージは彼女の生の憧れの凝集物とといえるが、これには忘れてならない背景がある。即ち、この子供像に生の憧れを結びつける場としてのニュージーランドである。というのは、バーネル姉妹やトラウト兄弟がマンスフィールドの子供像の全てというわけでもなく、他の作品には残酷さ、傷つきやすさ、おろかさというイメージを与えられた子供達も登場している²³⁾。生の讚美とつながる理想の子供像はニュージーランドの思い出——自分の少女時代に限られているのである。では、マンスフィールドにとってニュージーランドとは何だったのか。

マンスフィールドと故郷ニュージーランドについては様々に言われているが、まとめてみると、(1) 若くして故郷を離れ、イギリス、フランス、スイス等異郷を転々と流浪する生活を続けたため故郷に対する想いが人一倍強かった。——彼女はロンドンの陰うつな気候を嫌い、生を浪費する人々を軽べつする。それに比べて故郷の自然や人々の明るさ、素朴さは思い出の中に増々美しく理想化されていく。(2) 結核という不治の病を得ての絶望、療養のため夫と別れて暮らさねばならない孤独、これを乗りきるためには不変の依り所が必要だった。(3) 最愛の弟の死で生きてニュージーランドの思い出を書き残すことを使命とした²⁴⁾。いずれにせよ確かなことは、ニュージーランドの中に彼女を創作へとかりたてる特異な力があったということである。友人への手紙では、‘At the Bay’が書かれる時の気持ちが次のように述べられている²⁵⁾。

私は書きながら感じたことです。「最愛の人たちよ、あなた方は死んではいけない。一切が記憶されているのです。私はあなた方にひざまずきます。私は自分を抹殺し、私を通じてあなた方をその豊かさや美とのうちに再生させます」まるでとり憑かれたような気持ちです。それから一切のことの舞台となった土地。私は自分にとって同じくらい「あなた」にもそこが親しい土地となるように努力しました。あなたはマリーゴールドをご存知かしら？ あの岩にかこまれた水たまりや、洗濯場の窓敷居にのせた捕鼠器を。それから私は深く掘り下げてみようと、私たちすべての持つ秘密の自己に話しかけようと——それを自覚してもらおうと——努力しました。

マンスフィールドが愛と善の生の世界を創造しようとする時、現実の舞台はあまりに厳しく、最大限に憶れを高め、生へと高揚させる力を持ち得ない。それを可能とするのは、幸せだった少女時代、なつかしい自然と人々の生きている思い出の世界でしかない。そこでは彼女は「美と豊かさの再生」に「取り憑かれ」²⁶⁾、生への憧れはふくれ上がっていく。そしてこの時、彼女自身の生も充填されているのである。

このようなマンスフィールドの状態は作品の上にも反映して他のものにはない雰囲気や描写を生んでいる。例えば、神など信じられないとする²⁷⁾彼女が珍しく神への憧れを表わしている箇

所が 'At the Bay' には見られる。

折々こういう光の矢が空に見えるとき、その光は実に深厳である。それを見ると、あそこにはエホバ、峻烈に見守る神、全能の神が坐っていらっしゃって御眼は常に油断なく、決してうむことなく、人間にむけられていることを思わずにはいられない。その神が最後の 審判日に再来するならば、地上の世界全体が震えおののいて、一つの崩壊した墓場に帰してしまうだろうとおもわれる。そして、冷やかな、輝く天使たちが自分をあちこちに追いまわし、至って簡単に説明することも説明する余裕は与えられないであろう……だが今晚は、あの銀いろの光の矢には、何か無限に喜ばしくやさしいものがあるように、リンダにはおもわれた。いまはもう、海のざわめきは聞こえてこなかった。あのやさしい、喜びにみちた美しさを自分の胸にひき入れようとするかのように、海は柔らかに息づいていた²⁸⁾。

ここに現われている、「やさしき神の眼」は現実には神や宗教を信じ得ないマンスフィールド自身に取り憑いた意識のもたらすものであり、これが生の讃美へと彼女を高め、真の「生」をつかめていない大人達をも窮極の所、暖かく包みこみ、その生を認める雰囲気を生んでいるといえる。また、ここでは彼女の心から去ることのなかった「死」の恐怖でさえ「生」に包含されるイメージとなっていることは既に述べた。これらの例は、ニュージーランドがいかにか彼女の意識に「取り憑いて」いたかを示唆するものである。ニュージーランドという思い出の中の聖域でこそ、彼女の靈感はふくれ上がり、生は讃美されるものとして彼女を充たし、そこにこれまで見たような子供のイメージが生まれ得たのである。その意味において、ニュージーランドは現実からの逃避の場というより、生きる、伸びるイメージを創り出す建設の場であり、マンスフィールドにとっては蘇えりの場であり、子供の美しい姿を可能にする不可欠なる背景であったといえよう²⁹⁾。

V

マンスフィールドは現実の醜さも残酷さも知った上で、ニュージーランドの、しかも自分の少女時代という枠組みの中で一つの生の理想を創り上げた。人が自らの幼年時代を語る時、ややもすれば感傷におぼれ、「昔はよかった」式の過去への退行、幻影化がおこり、思い出は変質し、他を突き動かすエネルギーと普遍性を失った脆弱なものになってしまうことが多い。しかし、これまで見てきたように、マンスフィールドの子供の世界は思い出を素材としながらも大人の世界に対峙する力強さ、人の感動を喚びます清新さを持っている。これは第一に、彼女にとってニュージーランドがなつかしむものではなく、現在に再生させ、今の自分、今の「あなた」に本当の自己を自覚させようとするものだからといえる。また、ニュージーランドは彼女をして生の讃美へと取り憑かせる靈感の役目を果たすものであり、過去の一風景以上の意味を持っていたからともいえる。そこでは思い出にふけり、過去に安らごうとするのではなく、もっと前向きに積極的に現在に映し出そうというマンスフィールドの生の姿勢が見られる。こうして、ニュージーランドの少女時代は「個人的な、過去のもの」という枠を越え、普

遍的イメージとして新たに創り出されたといえよう。そして「ニュージーランドの子供達」も、思い出の中に立ちかえるのではなく、生へと前進しようとするマンスフィールドの姿を映し出している故に、生き生きと再生され、一人立ちしたのである。

更に、子供のイメージを強いものにしたのは、彼女の「作家としての技量」である。特に彼女は二つの天性の武器を持っている。一つは「完全な表現力」——語りたい一切のことを自分と同じくらい相手に伝えることを可能にする技巧（彼女自身文章を書く上で第一の条件にあげている）——であり、もう一つは、ゴードンのいう「対象の心へ入り込む修行」の技であろう。彼はそれを次のように評価している。

対象の心へ入りこむ修行は作家が子供の心へ入りこむ場合は絶対必須のものである。成人作家が成人の心を描く場合、その人物が描き足りなかったり、作家自身の個性がまぎれこんだりする箇所を看破するのは極めて鋭い批評家だけだろう。この故に、成人の性格や成人が成人に与える影響を描くのは、比較的やさしいのである。作家はその人物に多少自分自身をまぎれこませても、尚ほんものらしい性格が紙上にでき上がることもあろう。しかし、作家が紙上に創造しつつある子供の性格に、その作家の大人の性格が少しでも紛れこんだら、たちまちばれてしまう。たいていの子供は、文学に描かれていく内に、どこか成人の知覚を露呈してくる。すぎ去った作家自身の子供時代をいかにも大人らしくいたわったりくやんだりする気持ちがたいていやってくる。『黄金時代』とか『幼かりし頃』とかいうような題名そのものがすでに成人の評価を含んでいる。ところがキャサリン・マンスフィールドにあっては、子供が子供として描かれ、子供自身の眼と相手の子供達の眼を通してみられている³⁰⁾。

マンスフィールドは登場人物の意識に深く入り込み、彼らを通して語る手法を完全なものにしている作家である。その彼女をして既に述べた「取り憑かれること」は更に対象の中に入りこむことを容易にしている。彼女は作品の中で、リンダとなり、ベリルとなり、またフェアフィールド夫人ともなれる。と同時に、キザイアにもロッチェにもなりきれるのである。

「あたし、ベリルおばさま？」キザイアはベリルのほうをじっとにらんだ。いったい、いま何をしたというんだろう？ 彼女はただオートミールのまんやかに河を掘って、それをふさぎ、そして兩岸のところから食べているところだった。だが、これまで毎朝それをやっていたのに、だれもなんとも言わなかったのだ。「どうしてあんたは、イザベルやロッチェのようにちゃんとして食べられないの？」大人はなんて無理なんだろう！³¹⁾

ここでもマンスフィールドの「取り憑かれた」意識によって、「子供の眼によって描かれた子供の世界」は、過去の世界を素材にしながらも、眼前のものとして生き生きとイメージ化されている。

VI

このように、マンスフィールドの子供のイメージは彼女自身の生への憧れ、執着と結びつい

て生まれたものであり、更に彼女の感受性がニュージーランドの想い出の世界の中で最大限にその力を発揮し、より美しく理想的でかつ生命力のある子供像の創造を可能にしたといえる。生涯病身で死と向かいあわせに生きてきた彼女にとって「生」のあり方は脳裏を去らないテーマであったと考えられる。子供達の生の前向きで躍動感に満ちたあり方は、老女達にみる遠観した静かな生き方とともに、彼女が憧れるものであったのだろう。そしてその憧れの強さは、本来子供に備っている生命力もあって、より積極的な生のイメージを彼らの中に創り出すことになった。

現代の作家が多く描くところの苦悩する子供像、病める子供像は、大人の悪や社会の病巣を告発し、人間心理を説明するものとしてそれなりに意義があるが、マンスフィールドのような一つのイメージの完全なる定着も我々に感動と示唆を与えるものである。芸術とは、多くの人が指摘することだが、窮極において人生を肯定するもの、そういう暖かみを含むものでなければならぬ。そういった意味でも、マンスフィールドの子供のイメージは、単なる過去の理想的子供像の定着以上の役割——読者の心にそのイメージを深く印象づけ、「生」の喜びを味わわせ、真の自己へと立ちかえらせる——を果たして立派に「芸術」たりえているといえよう。

稿を終えるにあたり、ご指導くださいました、岡山大学文学部英語英米文学科主任・富士川和男教授に深謝の意を表します。

尚、本文中の訳文はそれぞれ、安藤一郎訳「マンスフィールド短編集」（新潮社、1957）及び、橋本福夫訳「マンスフィールドの手紙」（八潮出版社、1977）のものを利用していただきました。

注

- 1) William Blake, *Songs of Innocence* (1789)
William Wordsworth, *The Prelude* (1850)
Charles Dickens, *Oliver Twist* (1837-8)
James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916), *Dubliners* (1914)
Elizabeth Bowen, *The House in Paris* (1935), *The Death of the Heart* (1939)
Graham Greene, *The Destructors* (1954)
- 2) 'The New Zealand Stories' とよばれる作品群。自分の故郷ニュージーランドを舞台とし、自分の少女時代を素材にして描いた。マンスフィールドの代表作とされる 'Prelude', 'At the Bay', 'The Garden-Party', 'The Voyage', 'The Doll's House' など、ほのぼのとした暖かさがにじみ出ている美しい作品が多い。
- 3) Ian A. Gordon, *Katirine Mansfield* (British Council, 1954).
- 4) 'At the Bay' (Sept. 1921), *London Mercury*, Jan. 1922. (以下()は完成年月日) 後、短編集 *The Garden-Party and Other Stories* (1922) に収録。海辺の避暑地(マンスフィールド一家が休暇を過ごしたこともあるニュージーランドの Day's Bay がモデル)の夜明けから真夜中までの一日のでき事が全12章で大体時間の経過に従って描かれている。大まかにいって大人の世界と子供の世界と自然を中心に展開されているが、登場人物の意識を通して彼らの様々な生の形態が浮かび上がっている。

- 5) *Prelude* (1918) 話の中心をなすバーネル家は実際のマンズフィールドの家族を模している。スタンレイは、実父ハロルド、リンダは母アニーの性格を映し出し、彼女の最愛の祖母がフェアフィールド夫人として、また自分の分身をキザイアの中に描いている。話に出てくる引っ越しも彼女が6才の時の体験をもとにしている。
- 6) 'The Garden-Party' (Oct. 14, 1921), *Weekly Westminster Gazette*, Feb. 4, 11, 18, 1922. *The Garden-Party and Other Stories* に収録。
- 7) 病気療養のために大陸を転々としたマンズフィールドは夫マリ (John Middleton Murry, 1889—1957) や親しい友人とも離れて暮らすことが多かったため、生涯におびただしい量の手紙を書いている。これらはマリの手によってまとめられ、二巻からなる「書簡集」(*The Letters of Katherine Mansfield*) として1928年刊行されている。
- 8) 1921年9月にドロシイ・ブレットに宛てて書かれたもの。当時はスイスのモンタナ、シュルシェールにマリと共に滞在していた。
- 9) やはりブレットに宛てて書かれたもので、1921年10月15日付けの手紙。
- 10) Katherine Mansfield, *The Garden-Party and Other Stories* (Penguin, 1951), pp. 24-5.
- 11) *ibid.* p. 36.
- 12) *ibid.* p. 39.
- 13) *ibid.* pp. 47-8.
- 14) *ibid.* p. 49.
- 15) 他の「ニュージーランドもの」にもしばしば「死」についての言及が見られるが、決して恐怖の対象として忌み嫌うものとしては扱われていない。'The Garden-Party' ではローラの純粋な心に「死」は人生の一部として、美しく幻想的なイメージを投げかけている。また 'The Voyage' では母を亡くしたフェネラの祖母の「死」に対する態度が、恐れや嫌悪や悲惨を超越した静かなものとして描かれている。
- 16) 'Bliss' (*Bliss and Other Stories*), 'An Ideal Family', 'Life of Ma Parker', 'Miss Brill' (*The Garden-Party and Other Stories*) 等に出てくる人々はいずれも人生に裏切られ疎外され、孤独に沈んでいく。
- 17) リューマチや結核に悩まされ、経済的にも恵まれず、また夫と離れて大陸を転々としたため孤独で精神的に不安定な時もあり、夫婦生活も必ずしも幸せなものとはいえなかった。
- 18) 1920年10月付けの夫への手紙の中で見られる言葉。
- 19) 'The Voyage' (Aug. 14, 1921), *Sphere*, Dec. 24, 1921. *The Garden-Party and Other Stories* に収録。
- 20) 'The Daughters of the Late Colonel' (Dec. 1920), *London Mercury*, May 1921. 同上。
- 21) 'The Canary' (July 1922), *Nation*, Apr. 21, 1923. 短編集 *The Dove's Nest and Other Stories*. (1923) に収録。
- 22) 'The Daughters of the Late Colonel' の二人の老女について、手紙の中で「彼女達の生活にひそむ美に頭が下がり、その美を発見することが私の望むすべてになりました」と述べている。
- 23) 'Miss Brill' (*The Garden-Party and Other Stories*) の初老の女性の最後の夢を仮借なく打ち砕く子供達は残酷な破壊者であり、'Sun and Moon' の子供は痛ましくも傷つけられ、'The Little Governess' (以上 *Bliss and Other Stories*) では無知な故にだまされ、職を失って途方にくれる若い娘が登場する。
- 24) ニュージーランドに対する想い、それを表わそうとする使命感を日記の中で次のように述べている。

"Now — now I want to write recollections of my own country. Yes, I want to write about my own country till I simply exhaust my store. Not only because it is "a sacred debt" that I pay to my country because my brother and I were born there, but

also because in my thoughts I range with him over all the remembered places. I am never far away from them. I long to renew them in writing.

Ah, the people — the people we loved there — of them, too, I want to write. Another “debt of love.” Oh, I want for one moment to make our undiscovered country leap into the eyes of the Old World.” — Antony Alpers, *Katherine Mansfield: A Biography* (Jonathan Cape, 1956), p. 212.

- 25) 1921年9月のドロシイ・ブレットへの手紙。
- 26) この「取り憑かれる」状態は‘The Voyage’の執筆時にも起こったと、1922年3月付けの手紙の中に述べている。こういう状態を引きおこす力をマンスフィールドは「靈感」とよんで、作家においては客観的で正確な表現能力とともに不可欠なものとしている。
- 27) 1921年5月のマリへの手紙の中に言及されている。
- 28) Katherine Mansfield, *op. cit.*, pp. 55-6.
- 29) マンスフィールドの感受性を生の讚美へと作用させたニュージーランドの力は、当時の彼女の状態によっても強められていると思われる。1921年6月からスイスのモンタナに移り住んだ彼女は、これより一年、マリとともに落ちついた日を過ごし、生の充実感を味わう。その中で創作は進み、10月までに *The Garden-Party and Other Stories* のほとんど半分を占める作品が書かれた。即ち、8月に‘The Voyage’、9月に‘At the Bay’、10月に‘The Garden-Party’、‘The Doll’s House’ というように代表的「ニュージーランドもの」が次々と脱稿されている。
- 30) I. A. Gordon, *op. cit.*
- 31) Katherine Mansfield, *op. cit.*, p. 18.